

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 2 4 2 号

2022 年 6 月 1 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「コリント人への第 1 の手紙講解説教」より (1 2)

コリント前書第 15 章

さて、キリストは死人の中からよみがえったのだと宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のあるものが、死人の復活などはないと言っているのは、どうしたことか (コリント I 15・12)

コリント前書 15 章は、パウロの有名な復活論の展開であり、実に聖書中の聖書ともいうべき場所でもあります。パウロ自身がもしここへ来て、この場所を講解してくれるとすれば誠に幸いと思います。しかし、誠にふつつかな私が、この誠に重大なる場所を講義させていただきますが、器は貧しくございますけれども、内容がすごい場所でもありますので、我々がすこしでも理解できるよう、ひたすら神の導きに頼るわけでもあります。

パウロの福音内容の中心は、キリストが死人の中からよみがえったことを宣べ伝えることでもあります。ペテロ、ヨハネその他の初代の指導者が宣べ伝えた

中心もこれでした。それなのに、あなたがたの中に、死人の復活、すなわちキリストの復活に続いて起こって来る死んだ信者の復活などにはあり得ないと言っているのはどうしてかと責めています。ここでは、誰かと特定していませんが、内村先生は、当時の神学生並びにアテネ大学の卒業生であろうと言われました。アテネは当時学問の中心でありました。彼らは、霊魂の不滅と言うことは信じましたが、肉体の復活という事実を信じておりませんでした。またある学者は、サドカイ派のユダヤ人の信者であろうと言っています。彼らも次第と復活を否定するようになっておりました。パウロが、もしも現在の東京の教会に現れ、信者を訪問したとすれば、多分、このパウロの一喝にあわない信者がどれ位いるであろうかと内村先生は言われました。

復活の事実

第1、復活は事実であること。

これを信じないことは事実と反していると言う。コリント前書の第 15 章の最初に、パウロは復活を見た 6 つの事実をあげました。最初にケパ (ペテロ)、次に、12 弟子、500 人以上の弟子、ヤコブ (イエスの兄弟で、エルサレム教団の指導者) すべての使徒、そして最後に自分パウロをあげました。これらの事実と反するのではないかと断言しています。

第2、わたしたちの宣教も、あなたがたの信仰もむなしくなること。

わたしたちの宣教は、イエスの復活を述べることにあります。復活がなければその内容も無くなることになるという。「あなたがたの信仰もむなしい」という言葉に注意する必要があります。この頃の信者は、キリストの復活はなくとも結構ですと言う者が多い。こういう信者は猛省する必要があります。それは聖書全体が主張している信仰ではないことになるからであります。イエスの復活抜き信仰があるとすれば、問題であります。

第3、(15 章 15 節) 神が実際にイエスをよみがえらせなかったとすれば、我々は偽証人となること。復活を否定しつつパウロを尊敬しているということは自家撞着であります。あたかも、イエスが神の子であることを否定しつつイエスを信じているようなものであります。

第4、(15 章 16 節)、死人のよみがえりとキリストのよみがえりとは同じこと

であること。

即ち、イエスのよみがえりによって、信者の罪が赦されて、信者も復活するのである。第 13 節と同じことをここで繰り返して述べております。信者の復活というものは、イエス・キリストの復活による、即ち、信者の復活を強調している重要な箇所であります。

第 5、(15 章 17 節)、もしキリストの復活がなければ、あなた方の信仰は空虚なものとなること。

「むなしい」という字は、「結果を得ることが出来ない」という意味であります。結果として、罪の赦しを受けることが出来ず、そして罪のうちにとどまることになる、と言っています。即ち、復活によって贖いが成就しているからであります。これがキリスト教信仰の基礎であり、これが崩れたら、信仰は崩れてしまいます。神は独り子をつかわして、人類のために罪の贖いを果たしてイエスが復活した、という事実が無くなれば、我々の信仰も無くなるし、神の愛（アガペー）も無くなります。

第 6、(15 章 18 節)、復活がなければ、信仰を持って死んでいった者も滅んでしまうこと。

第 7、15 章 19 節、復活が無ければ、我々の生きる望みが無くなってしまうこと。我々クリスチャンは、この世の楽しみを退けておりますが、我々の復活の望みが空虚なものであれば、我々は最も哀れむべきものとなる、と言う。

パウロの福音の中心

パウロの福音の中心は、罪の赦しを得て、復活する者となることでありま
す。従って、パウロの福音の精髓は、「イエスの復活」にある。哲学的、神学
的教理、その他の哲理には依っておりません。ひとえに、イエス・キリスト
の復活から起こっています。ヨハネ伝では、永遠の生命を問題としていま
すが、これは漠然としています。例えば、牧師は貧乏であると言っても、漠然
としている。たとえば、毎月いくらの給料をもらって生活していると言わな
ければはつきりしません。ヨハネの永遠の生命もどういものかはつきりし
ません。パウロは永遠の生命と言わずに、イエスの復活を宣べました。物事
は具体的にになった時に力が出ます。漠然とした愛、信仰、望みというもの
は、その人を動かす力とはなりません。商売人に力のあるのは、金儲けをす
るという具体的な目的があるからです。ですから、勉強して働く。そうす
から、パウロにとって復活するということが福音の中心でした。パウロは、
目に見えないものを望むと言いました。見えるものは一時的であり、見えな
いものは永遠であるとも言いました。あるいはまた、上なるものを求めよ、
などという漠然とした言葉を使いますが、パウロの言うところは、復
活体を求めよと言うことです。パウロの文章を読めば、そこがはつきりして
きます。

救いの根拠は、「イエスの復活」という事実にある

ローマ人は戦争に強かった。皆に軍隊の訓練を施したらしい。日本人も、我々の青年時代には、軍隊に入れられて訓練をやりましたから、精神的にも、肉体的にもしっかりしていました。弊害はあったが、軍隊は人を鍛えます。最近の青年は、すぐ、人を殺したり、悪いことをやってのける。訓練がない。ローマ人も強かったが、国が栄えて次第に訓練が必要なくなったので、道徳的にも墮落して来ました。世界中が次第にそうなる傾向にあります。背骨のない人々はどうしようもありません。そのような時代にイエス・キリストが生まれました。人間の最も大切なことは、正しいということと、不正ということを区別することです。それがどうでもよくなったなら、人間は動物と同じです。人間と動物との違いはここにあります。正不正の区別こそ人間の人間たる所以であります。近頃これがぼやっとしてきている。自分が生きるためには何をしていても良いという思想になって来ています。道徳の背骨が無いとこうなります。しかし、正しいことを正しいと知りつつ行う力が無い。この罪が人間の不幸の根源です。この罪に対する赦しの問題がキリスト教の中心課題であります。今日拝読しました使徒信条、これがキリスト教における信仰告白であります。が、「罪の赦し」「体のよみがえり」「永遠の生命」、これが、使徒信条の中心課題です。最初の「罪の赦し」が分かった時、次の「復活」「永遠の生命」が分かって来ます。「使徒信条」を一言で言え

ば、「罪の許しを信ず」であります。これは「イエスの復活」と裏表になっている。我々の主観的な確信は常にぐらつきます。当てにはなりません。永遠に動かされない救いの根拠は、「イエスの復活」という事実にあります。

使徒信条

「われは天地の造り主、全能の父なる神を信ず。我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、処女マリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府（よみ）に下り、3日目に死人の内よりよみがえり、天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまえり、かしこより来りて生ける者と死ねる者とを裁き給わん。我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、身体のよみがえり、永遠（とこしえ）の生命（いのち）を信ず。」

一人の真実の信者で、その国は一新される

それは、死がひとりの人によって来たのだから、死人の復活もまた、ひとりの人によって来なければならない。」(コリント I 15. 21)

事実、キリストが復活されたのだから、前に書いたような8つの心配は要らないという。これは復活を肯定する強い文章であります。このキリスト復活の上に、パウロの終末論はよりかかっています。キリストの復活が終末論のはじめであります。これが無くて終末論はありません。ここに「ひとりの人」によって、とありますが、これは実に名訳でありまして、文語訳では、「人」と書いてあるだけで、一人かどうかはつきりしない。原語では3人称単数ですから、一人のひとで無ければなりません。人間一人の値打ちが如何に大切か分かります。内村先生はこの注解で、「人生、善悪の根源は、一人にある。我らの品性を感化し、個人性を変化するのも一人による。国にひとりの真実の信者があったならば、その国は一新される。」と言われました。いわんや、教会に一人の真実な信者がいたならば、その教会は新たになります。我々は、一人の人から感化を受ける。昔から、口伝と言われるものも、一対一です。一人によって救いが来たのであります。

全ての中に神がすべてとなる

「そして、万物が神に従う時には、御子自身もまた、万物を従わせたその方に従うであろう。それは、神がすべての者にあつて、すべてとされるためである。」(コリント I 15・28)

28 節が神の啓示の要約であります。世界は二つの思想に分かれていて、一つの思想は、すべてのものは神に帰するのである。悪も善もみんな河が海に注ぐ如く神になる、即ち、汎神論であります。もう一つは、個人はあくまでも個人であつて、永遠に個として存在するという考え方があります。しかし、キリスト教は、このいずれでもありません。個人はどこまでも個人であるけれども、個の中に神が満ち満ちているという。すべてのものの存在を認めつつ、全ての中に神がすべてとなる、というのであります。これは哲学、歴史の終局であり、信仰の理想であると内村先生は言われました。これはパウロの人間の復活から起こって来ます。我々はこの中で生きています。これが少しく分かってきたときに、この世で我々を縛っているものすべてが解けて来ます。

かじりついていく時に分かる

パウロの終末論による未来観は、3段階、即ち、キリストの復活、再臨、終末から成っており、そこにおいて死が征服されるのであります。……

ロマ書で、罪を犯したものは死ぬと書いています。今日のところで言えば、アダムにある者は死ぬ、と言っています。また、パウロは「キリストにある者はすべて生かされるであろう」と言っています。我々は、勝手に解釈しておりますが、この二つは矛盾しないと思います。この世で分からなくても、来世において必ず分かる時が来ると信じます。イエスは「律法を真剣に守った者は永遠の生命を得る」と弟子達に言いました。またヨハネは、「イエス・キリストの十字架を仰ぎ見たら救われる」とも言いました。また、パウロやペテロは、「主の名を呼び求める者は救われる」と言いました。また、イエスは「主よ、主よと言う者でもことごとく天国に入るとは限らない」とも言われました。これら一連の記事を読みますと、どうすれば救われるのかがはっきりせず、あたかも矛盾しているように見えますけれども、きっとこれは矛盾しない。我々が真剣に、一つにかじりついていく時に分かる時が来る。現世で矛盾しても、来世では矛盾しなくなると、私は思います。聖書の重要な箇所においては、わずかな人間の知恵をもって勝手の手を加えてはならないと思います。聖書をそのままの形で、それを自分の命とすることが最も真理を会得する正道であると思います。